

壁から中隔部にかけて、regionalなphaseの遅れを認め、他の15例に比しRVEFの低下RVSDの増大もより明瞭であった。本法によるphaseの遅れの局在に加えEFおよびphaseのS.D.の検討は、心筋梗塞の部位診断特に従来困難とされた右室梗塞の診断に有用と思われた。

12. 不安定狭心症に対するPTCAの一有効例——核医学検査による検討——

西岡 隆文 広江 道昭 川崎 幸子
日下部きよ子 田崎 瑛生 (東女医大・放核)
鈴木 紳 松本 直行 本田 喬
関口 守衛 広沢弘七郎 (同・心研内)
遠藤 真弘 (同・心研外)

不安定狭心症に対する内科的治療後PTCA(経皮経管冠動脈形成術)の有効例を運動負荷(Ex)核医学検査により検討したので報告する。症例は37歳男性で、82年4月より労作性狭心症があり抗狭心症薬の投与を受けていたが、9月23日安静時の狭心発作頻発のため東京女子医大心研に入院した。入院後大量の亜硝酸剤とCa拮抗剤の経口投与およびニトログリセリンの点滴静注も無効でありβブロッカーの併用により狭心発作が消失した。冠動脈造影で左前下行枝#6に90%の狭窄を認め11月18日PTCA施行し狭窄部位が50%となり開大に成功した。PTCA前後に施行したEx.²⁰¹Tl心筋シンチグラムで前壁中隔の虚血の著明な改善を認めた。またEx.心プールスキャンによる左室駆出率はPTCA前で安静時59%がEx.により46%に減少したが、後では安静時57%がEx.で70%に増加した。PTCAによる心筋虚血の改善と心予備能の増加が核医学検査により実証された。

13. 関東地方におけるIn Vivo核医学検査の実施状況——ICPMコード利用による調査報告

佐々木康人 木下 文雄
(日本アイソトープ協・核・用語分類委)

本委員会では翻訳し、厚生省が出版したWHOのICPM(医療行為の国際分類)核医学コードに基づいて、その試行と検査実施状況調査を行った。関東地方におけるIn Vivo検査実施状況を集計し、第22回総会で報告した全国集計と比較した。調査対象施設は237(全国885)で回

収率は82.3%(全国74.8%)であった。回答のあった195施設で昨年6月に実施された検査数は32,811件で、全国の32.8%(人口比率は34.3%)であった。関東地区10県の検査数は東京が42.2%と人口比28.9%に比し多かったが、他はほぼ人口比とよく対応した。検査項目別検査頻度は、肝シンチグラム22.7%、骨シンチグラム12.2%、腫瘍シンチグラム9.1%、甲状腺シンチグラム7.7%、甲状腺RI摂取率6.4%で、順位比率とも全国の動向とよく平行した。しかし、県別に順位を見ると、動態検査が多く行われている県、脳シンチグラム、脳血流検査、レノグラムが多い県などの特徴があった。

14. 尿路結石症例での腎シンチグラムについて

頼川 晋 李 漢榮 池田 滋
石橋 晃 (北里大・泌)
黒川 純 (城西大・外)

上部尿路結石症を有する者30名(男性14,女性16)につき^{99m}TcDTPA腎シンチグラフィーを通して非罹患側におけるstasisの検討を行った。結果30例中29例に腎シンチグラム15分像において軽～高度のstasisを見た。また正常例39例のT1/2を算出し、519.6±233.4秒との値を得、これをコントロールとすると、30例中5例にT1/2の延長を見た。IVPでは明らかな異常所見を示さなかったにもかかわらず、腎シンチグラムでは全例にstasisの所見を得たことにより、結石症におけるstasisの検出には腎シンチグラフィーがより有用なことから結石生成におけるstasisの役割が重要であり非罹患側にも形成される可能性があることが示唆される。

15. Mikulicz病の一症例——核医学検査を中心として——

小須田 茂 佐藤 仁政 中村 将孝
石橋 章彦 高原 淑子 与那原良夫
(東二・核医セ)
福武 公夫 (同・歯)

ミクリッツ病とシェーグレン病候群は組織学的に類所の所見を呈し、鑑別が困難であると言われている。

今回、われわれは両側唾液腺の無痛性腫脹と口腔内乾